

# メディア・リテラシー教育の諸問題

古田 尚行

## 1 はじめに

三省堂『現代の国語3』に採択されている「メディア・リテラシー」の中で、菅谷明子氏は次のように述べている。

メディア・リテラシーとは、メディアの特性や社会的な意味を理解し、メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」する能力である。と同時に、自らの考えなどをメディアを使って表現し、社会に向けてコミュニケーションをはかることで、メディア社会と積極的につきあうための能力でもある。つまり、ひと言でいえば、メディアが形づく「現実」を批判的（クリティカル）に読み取るとともに、メディアを使って効果的に表現していく総合的な能力と言いかえてもよいだろう。

メディア・リテラシー教育の必要性がさげばれて久しい。こうし

た事情は、たとえば、依然として存在している週刊誌等のゴシップ記事や、政治の劇化をメディアが総力で創造し、受け手もそれに参加していき、問題の本質をずらしていつたりするというメディアとその倫理性の問題、あるいはテレビ番組やウェブ上にある情報を現実の世界と簡単にリンクさせ、事実かどうか定かでない情報を無批判に享受していくという問題、またそもそもそれらの状況を作り出した過剰な情報が溢れている社会における情報選択の難しさ等々、さまざまに考えられる。<sup>注1</sup>

ただ、その結果求められるべきメディア・リテラシー教育が、情報の送り手による情報操作に騙されないように、主体的に情報を選択していくという、ともすれば受け手の能力向上を目的としたものではないかと思われるところがある。こうした背景についてやや穿った見方をすれば、今日のような高度情報化社会におけるメディア・リテラシーの有無は「勝ち組／負け組」を決定し、だからこそ「負け組」にならないためにぜひとも獲得しなければならぬリテラシーなのだ、といういわばサバイバル言説状況下の殺し文句として機能しているのではないかと感じられるふしもある。

近年ではあまり聞かれなくなったが、健康食品番組である特定の食品が良いと喧伝された次の日に、食品売り場でその食品が売り切れたという話は、その番組の情報が科学的に立証されていない場合、番組を見て食品を買った消費者を嘲る風潮があった。それらは疑似科学、エセ科学だと主張している専門家の情報を知っている人からすれば、買った消費者へのまなざしは冷ややかで厳しい。「なんて愚かで、メディアに騙されやすいのだ」と。一方で「自分だけはメディアには騙されない」というある種の自負心、優越感もあるかもしれない。

しかし、これは主にメディア・リテラシーの問題としてではなく、情報の多寡の問題として処理されるべきではないかと思う。ある情報を知っているか、知っていないかによって区分けされているだけのことであって、決して菅谷のいうような能力ではない。やや詳しく述べると、ジャンルや内容の異なる領域においては、つまるところ、メディア・リテラシーの問題だけではなく、ある分野・領域の語彙・知識を知っているか、知らないか（関わっているか／関わっていないか）という問題でもあって、テキストを批評する力やテキストへの向き合い方は容易に変容するのではないかと思う。

むしろ、現実的にメディア・リテラシーが問題となるのは、ある情報が「真／偽」のいずれに分けられるのか、ということであるように思われる。結果、「真」なるものの構築にも躍起になる。有用な情報を選別しながら（一方で関わりのない情報を黙殺しながら）論理的に組み立て、ある程度の数の賛同者が得られれば（そして反論を完膚無き叩き潰せば）普遍的かつ絶対的な真理を築くことが

できるといふ幻想。「真／偽」という二分法を用い、偽を取り消し、喝破したところに見出す「真」なるものの確定は、確かに依然として有力な世界理解の仕方の一つであろうし、実際に社会に応用されているのも事実である。

だが、そうした「真」自体もある文化共同体内部において通じる暫定的なものでもあり、だれか、あるいはなにかによって、<sup>注2</sup>ばを通じて「構成されたもの」である。

だれかがある情報をもとにしながら、だれにむけて発信するのを見据えながら、整序し、ことばを選び、コメントし、時には誇張し時には慎重になり、たまに自身の立ち位置・主義が前面に出てくることもあり、そのことを自嘲気味に、あるいは気づかぬままに叙述していく。もちろん、そのだれかが発点ではなく、だれかが所属している複数の文化共同体へも注目することで、だれかの発話スタイルそのものを既定している諸言説への問題も窺え、そしてさらには語りの問題も浮上してくる。

稿者は、メディア・リテラシーは情報化社会において必要な能力だとして認めるにしても、どこまで範囲を広げるのか、どの問題領域とつながりをもたせ、どの方法論を援用していけばいいのか、国語科としてメディア・リテラシーをどの程度見据えた能力として育成していくのか、そのことに関心がある。実際、メディア・リテラシーの問題を文学テキストや古典テキストを読む際に持ち込むことも可能である。メディア・リテラシーの問題を単なる情報化社会という文脈に限定させてしまうことは、問題を矮小化するだけではないかと思う。むしろ、さまざまなテキストに読みの手法や観点を応

用していき、ある出来事を語るという行為自体の問題としてひろく捉えていきたいと考えている。<sup>注3</sup>

以上のことを踏まえながら、実践報告を行っていく。

## 2 授業の実際

メディアについて語られたテキストは数多くあるが、前掲の菅谷明子の「メディア・リテラシー」を軸として、メディアとの付き合  
い方を考えることを目的とした。それ以外のテキストとして、稿  
者の勤務先で生徒が併用している問題集（『中学実力練成αスタン  
ダード 国語3年』文理、二〇〇九年）のテキストをとりあげた  
り、高等学校の教科書や漢文教材から選んだりした。<sup>注4</sup> 漢文教材は本  
稿の末に本文を載せる（資料1・2）。

実施時期 二〇一一年四月中旬～五月中旬

対象学年 中学3年生 3クラス 130人

授業の流れと使用テキスト（全11時間）

- メディアについての問題についての作文、発表…1時間
- ①菅谷明子「メディア・リテラシー」…3時間
- ②酒井邦嘉「科学者という仕事」…1時間
- ③池内了「疑似科学入門」…1時間
- ④佐藤信夫「コインは円形である」…1時間
- ⑤「三人虎を成す」（『戦国策』）…2時間

⑥「三人之を疑ふ」（『戦国策』）…1時間

○メディアについてのまとめ、作文…1時間

それぞれのテキストについて、扱い方を以下に述べる。

②酒井邦嘉氏の「科学者という仕事」は、ウェブ上の情報と出版物との違い、また知の獲得のプロセスの違いを述べた、やや古いテクノロジー批判のテキストである。とくによくありがちな、必要な情報というものは自分の足で見出すもので、出版物の方が信頼がかけるといような考えは、他のテキストに比べて学習者にはわかりやすいものであった。

③池内了氏の「疑似科学入門」は、たとえば、マイナスイオン効果や血液型占いなどの「疑似（似非）科学」の状況を概観したものであるが、テキストでは、私たちが容易に信じ込まされてしまう原因の一つとして、「見かけの相関」（一見因果関係がありそうだが、実はまったく無関係）について取り上げており、また単純な因果関係ではない「複雑系」と呼ばれる状況があることを述べている。<sup>注5</sup>

④佐藤信夫氏の「コインは円形である」は、当初扱わない予定であったが、語るものの視点がいかに重要なことを考えるために読むことにしたテキストである。言語表現と人間の認識との関わりや、自身の慣れ親しんでいる見方（慣習化された見方）等を中心に読み解いた。<sup>注6</sup>

⑤「三人虎を成す」の取り上げた箇所は、本来は「讒言の恐ろしさ」を述べたものであるが、メディアの問題を考える関係で、「反復されることで風聞やうわさが事実として人に認識されるようにな

る状況」の例として、授業では扱った。

⑥「三人之を疑ふ」も、「三人虎を成す」と同じような構造ではあるが、違いは「三人虎を成す」の中傷された人物である龐葱や讒言を信じた魏王がどのような人物かが述べられていないのに対し、曾子の母は「信」、「慈母」と評されている。そのような人物でさえ嘘を信じてしまった、という点。また、噂の曾子は「賢」とあり、また曾子は孔子の弟子でもあったので、このこともまた違いとして取り上げた。

また、これらのテキスト以外にも、学習者が2年時に読んだ『徒然草』89段の、いわゆる「猫また」の話も想起させた。よくわからぬものを信じてしまう、人の心の危うさ（隙の多さ）も、漢文テキストの問題と無関係ではないと考えたからである。人が何かを信じてしまう（囚われる）という問題も、発展として考えさせたかったが、これはできなかった。

②はどのようなメディアが信頼される傾向にあるのかという問題（ウェブ情報やテレビなどよりは書籍、新聞などの出版物の方が信頼できる）、③はメディアの常套手段であり、私たちがあまり耐性のない読み誤りがちな統計資料やデータの問題、④は物事を語る視点の違いによって表現されることばとその受け手への表現効果の問題、⑤は反復されることで情報が強固になっていく問題、⑥は情報の受け手や情報の中の人物の社会的権威の高さと情報との関係の問題（たとえば、ニュースにおける話題人物に対する視聴者の関心、見た目の印象等を含めた好悪も関係があるだろう）を意識して授業を行った。

### 3 学習者の反応

① メディアといっても、ラジオ、新聞、テレビ、インターネットなどがありますが、それぞれの情報に主観がまじっているとするのは気付きませんでした。それほど、メディアと私たちの生活は同化しているんだと思いました。……（メディアは）私たちの生活にどうして入っている物になっています。なので、本当の事とウソの事を見分けられなくてはならないと思います。正  
面からその事柄を受けとめてみておかしくない物も、いろんな考えを持っている状態を見ると、おかしいと気付けるのではないのでしょうか。様々な見方を持つてば、もつと積極的にかかわっていきけるのではないかと思います。

② 私は、テレビや新聞紙で「これが歴史の真実」などとあった時、まず第一に疑うようになりました。また、人間はそれらしい言葉を並べたり、何度も同じことを言えばあっさり信じてしまうのかと少し恐ろしくなりました。流れた情報や噂にすぐに左右されないようにと思いました。偏見や誤情報は防ぎようがないので、一つの情報を様々な視点で見、できるだけ自分の中で何が正しいかを判断するくせをつけておけば、大きな失敗を防ぐことができると思います。また、私はインターネットをよく使うので、これからは本屋や図書館などにも行き、能動的な作業を増やしてじっくりと理解を深めていきます。

③ 1つ変わったことがあります。TVとかインターネットは便利で良いと思うし、私にとってTVなんかは無いと生活に困る様な存在です。授業で送り手側と受けとり側の事についてやったけど、送り手が悪いと思っていただけ、受け取り側も悪い所があるんだなあと思いました。なので、受け取り側の私たちは、情報を受け取る時気をつけないといけないんだと思います。……TVのニュースとかも、本当にそういう事なのか判断するには、1つの局を見るんじゃなくて、他の局のニュースとかを見るのが良いと思います。……1つの局だけでいいんじゃないかという事があつたけど、私はいろんな局があることで1つの物事を判断する材料になると思うのでいろんな局があつていいんじゃないかなーと思います。

④ メディアと似ているなと感じた事がありました。それは情報は人の間でも動いていくということです。例えばAさんとBさんがけんかしました。それを見ていたCさんがとなりのクラスのDさんに「AさんとBさんがけんかしたんだよ」と言います。その一人が二人が増えてそのとなりのクラスのEさん……みたいな事が沢山あると思います。普通の事かもしれないけど、よく考えたらそれは結構怖い事なんじゃないかな?と思います。これはメディアの問題ではないけど、似たようなことがメディアにもあると感じました。

⑤ 現実というのは、メディアや人を通すほど違うものになるの

で、送り手もできるだけ現実と同じように、いろいろな視点からみて情報を出してほしいし、受け手の私たちも1つの視点からではなく、いろいろな視点から物事を見て、きちんと判断するようにしたいと思いました。私たちは情報が無いと生きていくことができないので、送り手の気持ちも気にながら情報を得ていきたいです。現実が送り手を通じて違うものとなって受け手にわたってくるのは、伝言ゲームみたいだと思いました。伝言ゲームはそっくりそのまま伝えられることができないので、情報も似ていると思いました。

⑥ メディアと二人きりで付き合うのはよくないと思います。みんなできあつた方がいいと思いました。メディアをあまり信じて、さわがず、おちついてとらえると、メディアと私たちの関係はもつと深くなると思います。そして、メディアについてもつと多くの人たちが興味をもてば、対等な関係を作りやすくなると思います。

……メディアの人たちは金を払ってテレビを見る私たちのお客と感じていないのかな?と思いました。だって雑誌の記事とかでも書き方を変えたり、うその情報を流したり……。お客とは思ってないみだいだけど、実際私たちが見る人、読む人、学ぶ人がいなくなったら、メディアは成り立たないはずだと思います。

そして、メディアの人たちの悪い所は、視点を変えれば「現実」も異なつて見えることとかを分かつて書いてる人がほとん

どなはずです。それなら、きちんと、そういうことを読む人に理解させておくべきだと思います。もちろん、読む人、きく人も注意深く、でも、メディアの人たちの私たちへの配慮も考えて欲しいな—と思います。それぞれにある課題を1つ1つとけたらいいと思いました。

⑦ 必ずしもその情報が正しいわけではないので、ある情報は70%くらい信じられていけばよいと思います。そうすれば自分はその情報がウソでもシヨックを受けることもあまりなく、残りの30%で「まあそんなもんか」とあきらめることができます。けれど、そのメディア内に自分の好きな人について流れていたら、私は多少ウソが入っていると分かっているでも、信じてしまおうと思います。そういう場合は、どう付き合っていけばいいかは、私にはよくわかりません。

⑧ 文章で、「世の中は、メディアを通しては語りきれないほどの矛盾を抱え、限りなく渾沌とし、真実はとらえどころがないほど複雑である」と書かれてあって、そこで私は確かにメディアは重要なことを教えてくれる大事なもののだけど、メディアによって、情報が違うと混乱し、話も矛盾し複雑だと思った。メディアには長所がある分、短所も多いので、メディアの情報を一人一人が頼りすぎず、また文章でもあったように「メディアが形づくる現実を批判的に読み取るとともに、メディアを使って効果的に表現していく」と良い付き合い方だと思う。でも、

実際、メディアの情報を聞いたら普通、そんなに疑うこともなく、信じこんでしまうと思います。少し批判的に考えてみたからといって事実かうそかわかる訳でもないし、わかりません。……「メディアを使って効果的に表現していく」と読んだ文章であつたけど、具体的にどうすればいいのかわからないなあと思いました。

⑨ あまり深く信じず、かといって全く信じないわけでもなく、絶妙な場所にいるようにする。信じすぎていたら、もしその事柄がうそだった時のシヨックが大きすぎて何も信じられなくなるから。全く信じないと、情報源がなくなるので何もわからなくなるから。……流す側の人はどう思うかや考えで流しているのかとか、なぜ全部映像などを流さないのかを調べてみたい。

こういう文章を読むと、いったい何が本当のことか分からなくなりました。テレビで放送されているのが全部じゃなくてもうそだったら、新聞に書いてあることも作者の思い込みだったら、私たちは何を信じて生きていけばいいんでしょうか。

\*適宜、学習者の不備に関しては稿者が加筆、省略をした。

#### 4 まとめ

今回の授業で、概ねメディアが私たちに差し出す情報にはバイアスがかかったものであるという考えを持つ学習者が多かった。そし

て、受け手として様々な視点から情報を見ていくという意識はかなりの学習者が抱いた感想である(①②③)。

また、今回のメディアの問題というのは学習者自身の身の回りにある出来事と無縁ではないと気づく学習者もいたのも事実である(④⑤)。

そして、実際にどのようにメディアと付き合っていけばいいのか、それらに積極的に関わっていくためにどうすればいいのか教材のこととは別に述べる学習者もいた(⑥)。

多くの学習者は、自分たちが世界を知るためにはメディアと付き合わざるをえないことを自覚している。それがなければ、何も知ることができないことを知っているからである。

しかしその一方で、それではいったい何を拠り所にしていけばいいのかがわからず、不安になる学習者もいた(⑦⑧⑨)。原理的に突き詰めれば、情報に絶対的なものはないし、送り手、受け手、あるいは媒体や社会状況により可変的なものである。そのことを自覚した上で、「何を信じて生きていけばいい」(⑩)かわからないとしても、どのようにメディアと付き合っていき、そのためにどのような力をつけていくか、これは今後も授業の中で生徒たちと考えるべきだ。

本実践の課題、反省点として、今回のような併読をさせる場合の教材の選定に甘さが残ったところ。同じメディアに関わるテーマだけではなく、実際にどのような過程によりことが発せられていくのか、こうしたことを踏まえたテキストを用意することが必要であった。そして、受け手からではなく、表現者としてメディアを用

いる場合のことも考えさせていく必要がある。これらの問題も日々の授業の中で考えさせていきたい。

## 5 おわりに

活字メディア、音声メディア、映像メディア、絵画メディア……私たちの身の回りには網の目のように張り巡らされている。そこから逃れることも、逆に支配することもできずに、それらに流されながら、しかしその中でしか世界を理解し表現していく糸口がないという現実を半ば受け入れながら生きている。

鷺田清一氏の次のことが、稿者の認識に近い。

「流されている」というのも、いまのわたしたちに深く浸潤してきている感覚であろう。緊密に編まれた見えないシステム、そのなかでわたしたちはじぶんの狂おしい欲望さえあらかじめ整流させられているようなもどかしさに浸されている。いろんなものを選びんで選んでいるような気味で、じつは選ばれているにすぎないのだ、と。そう、日々「泳がされている」という感覚である。なにかを欲望する前に、欲望のメニューがセットされ、欲望のたどる軌跡があらかじめ描かれていくような世界。世界を選びんで編むのではなく、消費するだけの、いや、消費させられるだけの世界。自分で選んでいるような気にさせられながら、選ばれているという実感しか残らない世界……<sup>注7</sup>

こうした「じぶん」は、現実の中で、しかしそれでも生きていかなければならない。

私たちの欲望や選択の方向そのものを整序し、私たちを貫通しているこの社会システムの中で、他者とともに生きること放棄することもなく、社会に関わっていきける、関わろうとする力があることを信じられる、こうした主体を育成していきたい。

#### 〈付記〉

本稿は、2011年8月11日に開催された第52回広島大学教育学部国語教育学会の発表（メディア・リテラシーと「ものの見方」を考える―「真実はいつもひとつ」か?）をもとに加筆、修正をしたものである。

当日の質疑応答やその後の貴重なご意見をいただいたこと、感謝申し上げる。その折、当日の発表の中で、最後に稿者が「何を信じていいのかわからない」という感想を抱く学習者がもっと多くあればよかったとおもう」と述べたことに、授業者としての立ち位置、主義に対する鋭い意見が出された。これは稿者が相対主義の立場を標榜することではない。また、徒に学習者の不安を煽ることを狙いとしたわけでもない。

まず、完全な相対主義はありえない。私たちは現実を生きている上で何らかの思想を抱えている。が、それでも「その思想しかありえない」ということに懐疑的にはなつて欲しいというのが稿者の想いである。そしてそのことと関連して、学習者の思想を揺さぶるよ

うな働きかけをすれば、当然不安になる。自身が立っているところが瓦解する感覚を想像すればよい。そうした不安も国語科には必要なことである。が、不安を煽って終わりではない。

誤解を生じさせたのは、その後どのような学習を設けるのかという展望を示さなかったことである。学習者に揺さぶりをかけた後に、どのようなプロセスの中でどのような主体として育成していくか、その展望をはっきりさせなかったことが疑問に残ったところだと思う。

また、授業者としての稿者ではなく、やや生活者としての稿者の考えが強く出ているところでもある。こうした問題は、(国語科集団として何を目標とし、そのために何を教材とし、どのように差し出していくかという意味で)勤務先の国語科教員との連携が不可欠であるので、今後も考えていきたい。

#### 【注】

1 国語科に関わる卑近なメディアの問題としては、教科書がそのうである。表記、注釈、挿絵、文章削除、あるいは古典の口語訳、書き下し文等、多数ある(難波博孝『母語教育という思想 国語科解体/再構築に向けて』世界思想社、2008年、306―308頁)。また、石原千秋『国語教科書の中の「日本」』(ちくま新書、2009年)や藤原聖子『教科書の中の宗教―この奇妙な実態』(岩波新書、2011年)のように、教科書の教材編成や使用されることばから編集者や社会の(ある方向に向かわせたいという)欲望のカタチが窺えることを指摘しているものもある。ただ

し、教科書の言説が、ただちに学習者に浸透するわけではなく、授業者の扱い方によって左右されるので、授業者は自覚的になる必要はあると思う。

2 真偽に関わる議論として、たとえば、歴史哲学の分野では「歴史の物語論」と呼ばれる議論があり、ある歴史的な事実の言明を行う際には、それがことばを伴って行われる以上（他にも、なぜその話題を選択したのか、逆になぜ選択しなかったのか、という恣意性も伴う）、主観性は免れえないし、そもそも完全に客観的な事実などはありません、より妥当、より、普遍的な事実しか構築できない、というものである。「歴史の物語論」に関しては、野家啓一『物語の哲学』（岩波現代文庫、2005年）に詳しく、本稿での理解も、多くは野家氏のものに基づいている。次の引用は、「真実」とは何か（傍線、稿者）について氏が言及している箇所である。

「ここまできて、われわれはようやく最初の問いに答えることができる。すなわち「真実」と「虚構」とを分かち基準は何かという問いである。これまで述べてきたことから、それが過去の事実（過去自体）との「対応」ではないことだけは確かであろう。だとすれば、われわれは「整合性」に依拠するほかはない。つまり、ある物語文が真実であるか虚構であるかは、それが「証拠」に基づいた「主張可能性」を有し、歴史叙述のネットワークの中に「整合的に」組み入れられるか否かにかかっているのである。逆に言えば、いかに荒唐無稽な物語文であっても、われわれはそれをア priori に虚構として排除する

権利をもつてはいない。真実であるか虚構であるかの判別は、あくまでも全体的布置との整合性という基準に従って事後的になされるほかはないのである。

むろん、ここで「真実」という言葉には「一定の留保をつけておかなくてはならない。過去が未完成であり、いかなる歴史叙述も改訂を免れないものである以上、いわゆる歴史の真実はその時点での「暫定的真理」または「仮説」の身分に留まるものだからである。反証可能性に開かれているという点で、歴史言明は科学言明と同じ身分をもつのであり、その限りで、歴史は「文学」とともに「科学」とも境を接していると言わねばならない。いや、科学言明もまた「保証された主張可能性」以外の真理基準をもちえないという反実在論の立場からすれば、むしろ「科学」もまた一つの「歴史(history)」であり「物語(story)」であるところ言うべきなのである。」(181—182頁)

また、社会構築（構成）主義の成果も、一つの参考になろう。ケネス・J・ガーゲン、東村知子訳『あなたへの社会構成主義』（ナカニシヤ出版、2004年）やヴィヴィアン・バー、田中一彦訳『社会的構築主義への招待—言説分析とは何か』（川島書店、1997年）などを参照。

3 こうした捉え方は、しかし、メディア・リテラシーの読みの手法と語り論のそれとを同列化している、つまり従来の読みの方法と比べても大差ないということかという誇りを受けるかもしれない。むろん、メディア媒体の違いによって絵画なら絵画、音楽なら音楽というメディア固有の読みの方法、あるいは文法があると

は思う。しかし、現状では稿者には判別するだけの力量はないので、今後の課題としておく。

4 ①菅谷明子「メディア・リテラシー」は三省堂『現代の国語3』、②酒井邦壽「科学者という仕事」、③池内了「疑似科学入門」は、生徒用問題集、④佐藤信夫「コインは円形である」は明治書院『新編国語総合』に依った。

5 本稿執筆中に読んだ本の中に、朝食を摂ることと学力向上との関係についても因果関係がはっきりしていないというものもあった。つまり、単純に朝食を摂ることではなく、朝食を摂ることができる家庭環境や生活態度が整えられているかが問題なのである(菊池誠、他『もうダメされないための「科学」講義』光文社新書、2011年、19―21頁)。

6 佐藤信夫氏のいう「レトリック」の概念は学習者には難しいため、加藤徹氏の『漢文力』(中公文庫、2007年)の例をあげて説明した。加藤は『老子』の二節に触れて、次のようにいう。「英雄や美談がもてはやされる社会は、裏返して言うと、不安を抱えた社会なのかもしれません。『老子』のレトリックのように、何事にも裏と表の両面があります。「着やせする」ということは、裏を返せば「脱ぎぶとりする」ということです。「生きのいい魚」というのは、実は「死にたての魚」のことです。しかし「脱ぎぶとりするタイプ」とか「死にたての魚」という言い方は、まず聞かれません。なぜなら大衆というものは、明るい面だけを見ながらからです。政府の発表でも、なるべく明るいイメージの単語を選ぶのが常です。自軍の退却を「転進」と言い換え、全滅を「玉

砕」と美化した大本営発表のようなことは、どこの国でもやっています。言葉の言い換えによる大衆操作のことを、漢文では「朝三暮四」と言います。(傍線、稿者、263―264頁)

7 鷺田清一「ぐずぐず」の理由 角川書店、2011年、51頁

■資料1 「三人虎を成す」(戦国策)傍線、稿者の本文

龐葱(ほうそう)、太子と与(よ)に邯鄲(かんたん)に質(ち)たらんとす。魏王に謂(い)ひて曰はく、「今一人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか。」と。王曰はく、「否。」と。「二人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか。」と。王曰はく、「寡人之を疑はん。」と。「三人市に虎有りと言はば、王之を信ずるか。」と。王曰はく、「寡人之を信ぜん。」と。

龐葱曰はく、「夫れ市の虎無きこと明らかなり。然れども三人言ひて虎を成す。今邯鄲の大梁を去るや市より遠く、而も臣を議する者は三人に過ぐ。願はくは王之を察せよ。」と。王曰はく、「寡人自ら知るを為さん。」と。是に於いて辞して行く。しかるに讒言(ざんげん)先づ至る。後、太子質を罷(な)む。果たして見ゆるを得ず。

■資料2 「三人之を疑ふ」の本文

昔者(むかし)、曾子(そうし)費(ひ)に処(ぢ)る。費人に曾子と名族を同じくする者有りて人を殺す。人、曾子の母に告げて曰はく、「曾參人を殺す。」

と。曾子の母曰はく、「吾が子人を殺さず。」と。織ること自若たり。頃く有り。人又曰はく、「曾參人を殺す。」と。其の母尚ほ織ること自若たり。之を頃くす。一人又之に告げて曰はく、「曾參人を殺す。」と。

其の母懼れて杼を投じ、墻を踰えて走る。夫れ曾參の賢と母の信とを以てするも、三人之を疑へば則ち慈母も信ずる能はざるなり。

#### 〔日本語訳〕

昔、曾子は費という町に住んでいましたが、費の人に曾子と同名同名の者がいて、(その者が)人を殺しました。ある人が曾子の母に告げました。「曾參が人を殺しました」と。曾子の母は「私の子は人殺しなどしません」と言い、ふだんと変わらぬ様子で機織りを続けました。しばらくして、別の人がまた言いました、「曾參が人を殺しました」と。曾子の母は、それでもなおいつもの通り落ち着いて機を織り続けました。しばらくして、さらにまた別の人が告げました、「曾參が人を殺しました」と。(すると)その母は急に恐ろしくなり、杼を投げ出し、土塀を乗り越えて逃げ出しました。そもそも曾參ほどの賢明さと母の子に対する信頼とがあっても、三人もの人が心を惑わせば、慈母といえども信頼がゆらぐものです。

\*漢文教材については、『漢詩・漢文解釈講座 第15巻 故事・寓話Ⅰ 故事成語』(昌平社)所収のものを取り上げたが、授業者

によって私に表記や日本語訳等、手を加えた箇所がある。なお、今回は書き下し文を中心として授業を行った。